第1特集

# これからの園運営を考える
## ～変化の中で子どもの育ちを支える園とは～

幼児教育・保育は今、社会から大きな期待を寄せられています。子育て環境が変化する中で、一人ひとりの育ちをより豊かに支えていくこれからの園の在り方を考えます。

インタビュー

## 「もっとよい保育ができるはず」と信じて、保育を見直し続ける

今、幼児教育・保育のさらなる充実が求められています。その背景にある社会の変化や、今後、求められる幼児教育の方向性について、白梅学園大学の無藤隆先生にうかがいました。

### 改善できる点を探し続けることで、保育の質は高まる

#### 園を取り巻く環境はどう変化しているのか？

現在、園を取り巻く環境は、多くの課題を抱えています。都市部の待機児童ばかりがクローズアップされていますが、さらに少子化が進み、今後、地方部では定員割れの園がますます増えていくでしょう。このような中で幼保、公私立、また子育て支援を含め、乳幼児の育ちをいかに社会的に支えていくか、まさに喫緊の課題といえます。

大都市圏を中心とした待機児童の問題を見てみましょう。すでに顕在化している待機児童に加え、おそらく一桁多い数の潜在的な待機児童がいると考えられます。この背景には、女性を中心として生涯にわたる人生設計をどうしていくかという社会的なテーマも横たわっています。子どもが小さい頃は育児に専念したいという人もいるでしょうし、子どもがいてもフルタイムで働きたいという人もいるでしょうし、しばらく育児休業をとってから復職したいという人もいるでしょう。

これは園の問題だけではなく、女性の再就職を可能にするためのワークライフバランスや職業訓練、採用する企業側の雇用条件など、さまざまな要因が絡んだ問題です。これからの社会は多様な選択肢を用意することで、長い目で見て家庭と仕事を両立させたいという保護者の思いに応えていく必要があると思います。

そのうえで、園の視点で考えれば、各園で日々行っているような良質な保育をより多くの希望する家族や子どもにも提供することで、日本の子どもの育ちをより大きく支えることができるでしょう。

白梅学園大学教授
**無藤 隆**
むとう・たかし
白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学、教育心理学。著書に『保育の学校（全3巻）』（フレーベル館）など

#### 保育の質の向上にゴールはない

変化の大きい今だからこそ、園の保育の質をいかに充実させるかは大きな課題といえるでしょう。

それでは、保育の質を高めるとはどのようなことか。幼稚園教育要領と保育所保育指針を見比べると、5領域の部分は同じことが書かれており、幼稚園と保育所ではまったく異なる保育をするようにといっているわけではないことを、まずはご理解ください。

その上で、どのように充実させていくことが重要なのでしょうか。それは企業で例えるとわかりやすいでしょう。「わが社には何の問題もない」と主張する企業は、ある時期、良い業績を上げていても、いつのまにか衰退の道を歩いていることがあるものです。優れた企業ほど、常に成長するために改善すべき点を自ら見つけ出そうとしています。

保育にも同じことがいえると私は思うのです。確かに多くの園では、それぞれに工夫し、子どもや保護者の信頼を得ているでしょう。しかし、それでよしとすることなく、昨年よりも今年、今年よりも来年に、よりよい保育を実現していくために「私たちならばもっと良質な保育が必ずできる」と考え、自分たちの保育を見直していくという姿勢を基本としてもつことが大切だと思います。

「自分たちは既に完ぺきだ」と思って満足したとき、そこから保育の質が向上することはないでしょう。今年うまくいったことが来年もうまくいくとは限らないのです。他の園を参考にしながら、自分たちの園の実情を踏まえ、よりよい保育を目指して努力する仕組みをつくることが何より大切だと考えています。そのためにも、幼稚園教育要領と保育所保育指針を改めて読み直して、具体的な策を講じていく必要があるでしょう。

幼稚園教育要領と保育所保育指針は、小中学校の学習指導要領と比べ、具体的な内容が細かく書かれていません。小中学校などと違い、教科書もありません。ある意味、漠然としているのですが、そこにはよさも難しさもあります。そもそも教育や保育は、今、目の前にいる子どもを幸せにすると同時に将来、生きがいをもって生きていくための素地をつくるというふたつの目的があります。このふたつを同時に実現するために、幼児教育においては、各園がすべきことをそれぞれ工夫する必要があるということです。小中学校に比べ、現場に任されている裁量と責任が大きいのです。だからこそ自己満足をせずに、自分たちで考え続けていく必要があるのです。

#### 保育を見直す3つの視点

次に、保育を見直していく上で重要な3つの視点を述べましょう。

まず、保育の中のエピソードに対し、学びのストーリーを描いてみることです。ある活動がどのような経験や学びにつながっているかを、保育者が集まって考え検討すること

### 無藤先生が答える 現場の先生からのQ&A

**Q 幼稚園教諭と保育士が協同していくには、どうすればいいのでしょうか？**

**A** 同じ地域の子どもたちであれば、小学校に入る前の段階で乳幼児期に必要な経験を同じようにしているべきです。幼稚園だからこれをする、保育所だからこれをする、ということが、基本的にはあってはならないというのが大前提です。

とはいえ、幼稚園と保育所は100年以上も異なる歴史を歩んできたのですから、一緒になれば違いが表出することもあるでしょう。そういうときは、お互いに学ぶ姿勢が何より大事です。例えば、研修などで一緒に学ぶ時間を設けることは非常に意味があるでしょう。

幼稚園教育要領と保育所保育指針には共通の5領域があります。この共通の土俵を軸にすえて、地域の乳幼児に体験してほしいことをどう実現していくか考えてみてはどうでしょうか。それは大変な作業ではあると思いますが、とても大きな意味のある大変さだと思います。

で活動をより深めることができるでしょう。

そして次は、日常の保育での出来事をカリキュラムに結び付けていくことです。どの園でも教育課程や保育課程、指導計画などを作成していますが、それらが具体的な保育とつながっていないことが少なくありません。

例えば、公園を散歩して子どもがきれいな花を見つけたとしましょう。そのときだけで終わってしまうのではなく、翌日、みんなに気づかせたり、１週間後、１か月後にどのように変化するかを伝えることで、子どもなりの発見があって学びが起こります。このように日々の出来事と計画とを往復させて、その都度、カリキュラムの中に位置づけることが保育の質を高めます。

さらに、保育者自身の姿を見直すことが、３つめの視点です。子どもの姿をよく観察している保育者はたくさんいますが、自分自身を見つめ直すのはなかなか難しいことです。園内研修でそれぞれの保育者の保育を振り返ることができますが、限られた時間の中で行うのはやはり難しいものです。そこでひとりでも簡単にできる方法として、例えば保育中、ＩＣレコーダーをポケットに入れておいてはいかがでしょう。帰宅時などに再生して、自分が子どもにどのような声をかけたかを聞き直すだけでも有意義な振り返りとなります。これを行うことで、保育者自身がずいぶん変わっていくはずです。

### 保護者と地域を巻き込みながら長い目で園を考えるメリットとは？

園長としては、こうした個々の保育者ができる見直しを推奨しながら、３年や５年など少し長い目で見て園全体の運営を考えていくとよいと思います。少し考えてみれば、例えば、保護者がお迎えに来たときに利用できる部屋がほしい、地域社会に対する掲示板を設置したい、保育者全員で研修に参加したい、など、さまざまな要望が出てくるでしょう。一度にすべてを実施するのは難しいと思いますので、優先順位を定めて改善を進めていくのがトップとしての役割だと思います。

今後は、保護者や地域住民を巻き込んでいくことも、さらに重要なこととなるでしょう。保護者の要望は多様ですから、意見は聞きながらも、保育とはどのようなものであるかをしっかりと伝えていくことが何より肝要です。保護者や地域住民の理解が得られれば、地域社会が大きな支えとなり、ひいては行政を動かすことにもなるでしょう。自分たちの園だけではなく、地域社会とともに機能する新しい保育や子育て支援の仕組みをつくる時期がきていると、私は考えています。

**現場のみなさんへ**

**保育は難しいですが、おもしろい。**なぜなら子どもは日々変わり、成長していくからです。そういった保育の素晴らしさを実感できるのが保育という仕事です。子どもが感じる楽しさをさらに増し、やりがいを深め、将来への可能性を広げるのが保育者の専門性です。それは、毎日の保育を振り返り、また明日何をしようかと構想するところから生まれます。帰宅中にでもふと子どもの様子を思い浮かべて、また明日頑張ろうと思える保育者になってください。

インタビュー

# これからの園に求められる 21世紀型子育て支援システムとは

現代は子育てが難しい時代といわれます。今の時代に合った子育て支援とはどのようなものなのか、白梅学園大学学長の汐見稔幸先生にうかがいました。

## 園、家庭、地域が協同する21世紀型子育てを

### 社会の総力をあげて子どもを育てる必要がある

子育てをめぐる環境が大きく変わった今、社会の総力をあげて子どもを育てなければならなくなっているというのが私の考えです。

21 世紀は人類にとって答えの見つかっていない深刻な問題が次々と出てくる時代になることが分かってきました。経済もアジアに中心が移っていき、アジア規模で行動しなくてはならなくなってきています。行動力のある柔軟な人材がかつてなく必要な時代になります。

こうした時代に対応するには、幼い頃から、発想力が豊かで、異なるということに興味を持ち、自尊感が高く、平和を大事にする、地球市民的な人間に育てていくことが大事になります。そのためには、「楽しい」「おもしろい」などと感じながら、自分がやりたいことを自分で見つけて没頭して遊び、それを大人にやさしく支えてもらいながら行う体験が不可欠です。

しかしながら、今は、そのような子育て環境が容易に手に入りません。例えば、「原っぱ」という言葉はもはや死語となってしまいました。かつて、子どもは原っぱや道端の中で自然に育ちました。もともと原っぱには道具がないため、自分たちで遊びをつくり出す必要があり、遊ぶことによって企画力、協力する力、柔軟な思考力などが培われました。しかし大人本位の社会となって原っぱが消えると、子どもの居場所がなくなりました。今では育児は、密室状態の中で行われ、子どもは親の顔色をうかがい、気遣いをしながら育つ子もいるという状況です。親はイライラしやすく、子どもは大人の評価を過剰に気にしてしまいやすい環境といえます。

### すべての子どもの育ちを支える「21世紀型子育て支援」を

こういう状況の中で、子どもを育てるには、どういった工夫や配慮が必要になっているのか。一言で言うと、かつての原っぱの代わりになるような仕組みをつくり出すことが必要と考えています。

社会全体で子どもを育てるには、20 世紀型から 21 世紀型の子育て支援へと移行しなくてはなりません。基本的には乳幼児期の子どもは家庭で育て、園という一時的な預け先があるというのが 20 世紀型のスタイルでした。しかし社会の環境が変わり、20 世紀型の仕組みでは全く不十分になってきています。

そこで、すべての子どもが活動に没頭したり、深く愛されている実感をもつことのできる 21 世紀型の子育て支援環境を急速に整える必要が生じているといえます。それは、すべての子どもの心や頭や体の柔

白梅学園大学学長
**汐見稔幸**
しおみ・としゆき
白梅学園大学学長・東京大学名誉教授。専門は教育学、教育人間学、育児学。著書に、『子どもの学力の基本は好奇心です』（旬報社）、『「格差社会」を乗り越える子どもの育て方』（主婦の友社）など。

軟な育ちを保障することなのです。

## 園の協力によって スムーズな育ちを支える

21世紀型の子育て支援への移行が必要な例を挙げましょう。

従来は、0～2歳児の時期でも、それなりの育ちの環境があったため、3歳になって園に入っても子どもはスムーズに育ちました。ところが、今は家の前の道路も車が通りますし、不審者の心配もあって、外で遊ぶことがうんと減っています。時には走るという経験もなく幼稚園に来る子も出てきています。当然、体が十分に育たず、冒険の楽しさを知らず、好奇心やいたずら心などもうまく育たないまま3歳になって入園してくる子も出てきます。

そこで必要になるのが園、特に幼稚園の協力です。地域の子どもが1、2歳児の頃から、週1回でもよいので、園を訪れ、周りの大きな子どもをまねて遊べば、遊びのモデルを手に入れることができます。園としては、これまでにない取り組みを行うのは負担もあると思いますが、それぞれができることを提案するような形が望ましいと思います。園にとっても、乳児と共に時間を過ごすことで、子どもの育ちのつながりを改めて理解でき、幼児教育のおもしろさと大事さをより実感できることもあるでしょう。

さらに理想をいえば、園だけではなく、地域全体で子どもを支えられる小規模な施設があちらこちらに設けられれば、すばらしいと思います。地域の高齢者が集い、保護者が一時的に子どもを置いて、おじいちゃんやおばあちゃんに見てもらえる家庭的な雰囲気のある場所があれば、子どもの育ちに大きなプラスになります。このような取り組みが全国に広がれば、日本の子育ての環境は大きく変わるでしょう。

## 保護者と園が協同し 育児力を高める

幼い子どもを短時間でも預ければ、それをきっかけに外で働く保護者が増え、それが育児力の低下を招くという懸念がありますが、それは大丈夫です。現代は家事にかかる手間がなくなり、朝から晩まで子どもを見られるようになりましたが、人類史上、これほど保護者が子どもについて頭を悩ませて責任を負うという時代はなかったのです。子どもが他の子どもたちと思い切り遊べば、気持ちがスカッとして家での機嫌もよくなるでしょうし、保護者もゆったりと余裕をもって子どもと接することができ、より充実した親子関係がつくれると思います。

また子どもがけんかしたり転んでしまったりしたときに、すぐに手を貸そうとする保護者を、「少し見ててあげてくださいね」と保育者が声をかけ、子どもが自分たちで解決する姿を見せることは、深い意味での保護者支援となります。

保育に携わるかたにはぜひ、社会全体で子どもを育てる21世紀型の子育て支援について考えていただきたいと思います。今後は、これまで以上に多様な育ち方をした子どもが入ってくるからこそ、保育をいちから見直す必要があるでしょう。現状のままで本当に大丈夫なのか、子どもがキラキラとした目をして過ごしているか、子どもの育ちにとって本当に必要なものは何なのかなどを、みんなで考えていくことが、すべての子どもの育ちを支えることにつながると考えています。

## 感情やコミュニケーションが 保育のキーワードになる

ここまでの話の中で、これからの園では特別に新しいことを始めなければいけないと感じた方もいるかもしれません。確かに新たな時代に合った保育へと見直していく必要はありますが、決して堅苦しく考える必要はないと思います。

例えば、今後ますます社会や日常生活の中にコンピュータが浸透していくでしょう。人間は、計算をしたり記憶をしたりする力は、到底、コンピュータにはかないません。そのため、コンピュータには備わっていない人間特有の力を育てていく必要があります。それは、例えば、感性であり、感情、新しいものを生み出すデザイン力です。これからの保育では、それらが重要なキーワードになっていくでしょう。

## 変化をおもしろがる保育者が 増えれば保育の質は高まる

しかし、感情やコミュニケーションがこれからの保育のキーワードだといっても、そこに決まった形はありません。保育者一人ひとりが思い思いに工夫をすればよいのです。ちょっとした工夫によって、「子どもたちの目が輝いてきた」「おもしろい絵を描けるようになった」といったことの一つひとつが保育の質を高めると、私は思います。

子どもの感情を引き出す保育は、一人ひとりの子どもと向き合う保育者が自ら考え出すものです。ですから、保育者自身が閉鎖的にならず、オープンマインドになって、いろいろなところに学びに出向いてください。保護者や子どもの変化、それに伴う保育制度の変化などを学ぶことで、きっとこれまで以上に保育が楽しくなると思います。

子育て環境が大きく変化する中、自らの発想を生かした保育によって子どもや保護者の成長を楽しむ保育者が増えれば、日本の保育の質はさらに高まっていくでしょう。

### 現場のみなさんへ

**失敗を恐れないでください。**子どもがちょっとしたケガをするなど保育の日常に失敗はつきものです。しかし、普段から子どもを丁寧に見て、保護者とのコミュニケーションを大切にしていれば、決定的な失敗は起こりません。むしろ、どんどん失敗をして、その中からたくさんのことを学んでください。失敗をして一生懸命に反省している姿は、周囲から見ると、「とても良い先生」です。失敗をしない保育者に魅力はないのです。

### 汐見先生が答える 現場の先生からのQ&A

**Q 幼稚園教諭と保育士が協同していくには、どうすればいいのでしょうか？**

**A** 短時間保育と長時間保育の幼児が同じ園にいると、必ずといっていいほど、保育者の間に考えの違いが生じます。これは、幼稚園と保育所とでは、長い歴史の中で保育者の保育や指導の観点が異なるので当然のことです。

ときには意見の衝突もあるでしょう。しかし、お互いを理解することを目指して本音で話し合えば、分かり合えるようになると思います。その際には、子どもの育ちを保障するという観点から、実際の事例をもとにして話し合うといいと思います。「このときの先生の立ち位置はいいのだろうか」などと、いろいろな考えの相違が出てくるでしょうから、それらを一つひとつ話し合っていってください。

幼稚園と保育所では、保育記録のとり方も異なります。みんなで持ち寄って検討してみれば、子どものどこに着目しているかがわかりますから、合同の研修に活用してもいいでしょう。

幼保の保育者が完全に理解し合うのは時間のかかることですが、子どもの育ちのために冷静な議論を続けて溝を埋めていってほしいと思います。

次ページより、子どもが育つ環境の変化、子どもの育ちの変化に対応し、さまざまな工夫をしながらよりより保育を実現しようとしている園の事例をご紹介します。